

30周年記念誌

理念経営の30年

そして未来へ

社会福祉法人 秀峰会

ご挨拶

秀峰会30年の軌跡と基本思想

社会福祉法人 秀峰会 経営顧問
桜井 里二
(さくらい さとし)



秀峰会は横浜の地に産声をあげ、今年で創設30周年を迎えました。これもひとえに皆さまのご支援の賜物と心から感謝しております。

秀峰会30年の歩みは下記の通り二分されます。

措置費制度の時代の16年間(昭和59年度から平成11年度)と介護保険制度の時代の14年間(平成12年度から平成25年度)です。

措置費制度の時代、秀峰会は入所施設(さくら苑)の設立・運営から始め、その後半期には施設運営に加え、各種在宅サービス事業への取り組みを始めました。

措置費制度の時代を象徴するのは「寝たきり老人問題」で、福祉業界はこの問題にどう対処するかが問われていました。秀峰会はノーマライゼーションの思想に基づき、人がどんな状況にあっても普通の人と同じ生活を営める環境の実現こそ目指すべき目標と考え、そのために多様な活動を実践してきました。

また、高齢者介護は明確な死生観なくしては成立し得ないとの視点から、すべての活動の根底に「デス・エデュケーション」の考えを据えて活動を展開しました。それらの活動に込められた思想は秀峰会のDNAとして永遠に継承されてゆくべきものだと考えます。

この記念誌は、それらを写真やイラスト等のビジュアルで表現することをコンセプトに制作いたしました。

介護保険制度は、高齢者の自立的生活の支援を基本理念としており、これにより高齢者が契約によって必要なサービスを選択、利用することとなりました。国の方針も施設系サービスから在宅系サービス重視に変化し、秀峰会はそれに対応すべく、横浜市全域で各種在宅サービスを提供できるよう体制づくりを行ってまいりました。また、秀峰会のサービスを統合的かつ有機的に提供する仕組みとして「ヒューマン・ケア・ネットワーク(HCNW)」を構築しました。地域の人々の生活支援をさらに拡充するため、HCNW構想を発展させ、医療、保育事業にも取り組んでおります。

今後も横浜市の皆さまの生活を支援するため、職員一同決意を新たに横浜市の福祉向上と発展に寄与してまいりたいと思います。今後とも、なにとぞご支援を賜りますようお願い申し上げます。

目次 CONTENTS

- ご挨拶 ● 1
- 理 念 ● 2
- シンボルマーク
- 活 動 テ ー マ

■ 写真で振り返る30年

- さくら苑開苑 ● 3
- CAPP ● 5
- おもちゃ美術館 ● 7
- ヨコハマY²共和国 ● 9
- 療育音楽 ● 11
- AOL ● 13
(語り部、カラーバード)

- AOL ● 15
(お化粧、おしゃれ、ファッションショー)
- 祭 り ・ 出 会 い ● 17
- 地 域 交 流 ● 19
- 空 飛 ぶ じ ゅ う た ん ● 21
- デス・エデュケーション ● 23

■ 秀峰会の現在とその先の未来へ

- 南永田桜樹の森 ● 27
- 多種サービスの統合的な展開へ ● 29
- ヒューマン・ケア・ネットワーク ● 31
- 2050年を見ずえて ● 33

■ 社会福祉法人 秀峰会

- 資 料 ● 35
- 年 表 ● 37

■ 理 念

1 人間が主体である

ご利用者のみならず職員、関係者が常により高い自己実現に向かって生活できる環境をつくります。

2 連帯の輪を無限に広げていく

地域社会との交流を通じて、あらゆる人が支えあって共に生きる地域連帯の実現を目指します。そして連帯の輪を世界に向かって広げていきます。

3 日に日に新たな今日を創造していく

この世に生を受け人は人生の旅路を歩む。そしていつの日か旅立ちの日が訪れる。人生の一日一日がその人の心に叶うものであることを願い、私たちは共に歩みながら支援活動を続けます。

■ シンボルマーク



このマークは、「秀峰会」のテーマにある「人に愛」より、その象徴である「ハート」をモチーフにして考案したもの。私たちが展開する様々な事業活動を繋ぐシンボルです。

■ 活動テーマ

天に星 地に花 人に愛

明治時代の文芸評論家である高山樗牛の言葉、「天にありては星 地にありては花 人にありては愛 これ美しきもの最ならずや」より、美しさ・調和・豊かさ・潤いを表現したものです。

さくら苑開苑当時、特別養護老人ホームには暗いイメージがありました。そのイメージを払拭し、明るく肯定的な特養ホームを創っていききたいという想いを込めて、この言葉を揺るぎなき活動テーマとして掲げました。

また、このテーマは社会福祉法人秀峰会及びその職員が常に目指すべき理想を示しています。



開苑当初のさくら苑

昭和59(1984)年 特別養護老人ホーム「さくら苑」開苑

その人らしい生き方を尊重し、支援 することが使命

昭和59(1984)年、「さくら苑」を開苑。社会福祉法人秀峰会の原点の施設です。

当時、特別養護老人ホーム(以下特養ホーム)に対する地域社会の目は、必ずしも理解あるものではありませんでした。特養ホームの建設を計画しようものなら地元の反対に遭うことは珍しいことではなく、家庭で介護しているご家族がその方を特養ホームに入居させるのは、極めて外聞が悪い時代でした。

特養ホームの実態にも問題があったと思われます。ご入居者の立場に立っていない施設運営の例もあり、一部にはご入居者の尊厳が十分に守られているとは言えない事例もあったと聞きました。地域社会の特養ホームへの偏見故に、自分の親を「特養ホームへは入

れたくない」と考える家族の声も耳にしました。

介護の現場はなぜこのような印象を持たれたのでしょうか。その背景にはノーマライゼーションの思想が浸透していなかったこともあったと思います。

そうした傾向は、制度運営の問題とは別に、その頃の社会一般に「老いや死に対する拒否的、否定的な意識」が根強くあったためではないかと思えます。

しかし、そもそも老いや死とは否定されるべきものでしょうか。長く生きることは、新しい発見と経験を多く積み重ね、人生をより豊かに意味深くしていくことではないでしょうか。死はその頂点であり、ゴールであり、生きるという事業の成熟の姿だという考え方もあるのではないかと私たちはそう考えました。

そのように考えると、身体的老化はともかく、高齢者の精神は無限に広がる可能性を持っていて、高齢期の日々こそ最も大切にされるべきではないのかと、私たちは切実に思ったのです。

開苑にあたって私たちが大切にしたいと思ったのは、ご入居される方一人ひとりが、生きている限りその人らしい生き方ができるよう支援すること。その方を自分たちと同じ生活者として捉え、可能性に満ちた存在として接し、一人ひとりが本来持っている力、主体的に生きようとする思いを大切にして、共に生活を築いてゆくことでした。

それは、やがて来る自分自身の老いと向き合うことでもあり、特養ホームのあり方、介護のあり方を利用者本

位のものにしたいという決意でもありました。





昭和61(1986)年 『CAPP活動』

愛する対象がいることが人を輝かせる

➤ 入居者一人ひとりが生きている限り、その人らしい生き方ができるように支援すること。さくら苑を開苑したときの私たちのその思いを具体化する環境を、どのようにつくってゆくか。その問いから、私たちは特養ホームでの生活の「特異性」を少なくし、できるだけ一般社会のそれに近づけようと考えました。それによって、ご入居者が「被介護者」から「生活者」へ、自ら意識を変えていくことができるのではないかと私たちはそう考えました。そうした環境づくりに大きな役割を担ってくれたのは動物たちでした。

昭和61(1986)年5月3日。日本動物病院福祉協会(JAHA)の組織をあげてのご支援により、さくら苑に犬や猫がボランティアとしてやって来ました。このことがや

がて、特養ホームの介護活動に動物が取り入れられることにつながりました。その日は、日本動物病院福祉協会が日本で初めて実施したCAPP(Companion Animal Partnership Program)活動の最初の一歩の日でした。

現在では秀峰会の多くの施設で実施されているCAPP活動ですが、特に思い出されるのはこんなエピソードです。さくら苑に入居した時には歩行も困難で、認知症状も出ていたあるご入居者が、ラブラドルレトリバーのヘレン、マリーと仲良しに。一日をベッドの上で暮らしていたその方は、犬たちに誘われるように、少しずつベッドから離れるようになり、一緒に散歩ができるまでに回復しました。やがてその方は娘さんと一緒に暮

らすために退苑。その後しばらくして老衰で寝込んだという話を聞き、職員がヘレンとマリーを連れてお見舞いに行きますと、マリーは嬉しさのあまりびよんとベッドに飛び乗って、その方の顔を舐めました。その方も「よく来てくれたな」と言わんばかりに、涙をぼろぼろ流してマリーを両腕で抱いていました。ヘレンはベッドの脇で頭を撫でてもらっていました。その方はまもなく亡くなりましたが、最後に愛する犬たちに会えてどんなに嬉しかったことかと思います。

生活の中に愛情を注げる対象がいることは、ご入居者を生き生きと輝かせてくれます。動物の世話はリハビリとなり、レクリエーションともなります。動物の予期せぬ行動で小さなドラマが絶えず起こり、生活に変化が生

まれ、苑内の雰囲気も人間関係も和やかになります。CAPP活動を始めたことにより、終日ベッドで過ごす人は少なくなりました。

私たちは動物を施設に導入する意味を次のように考えました。「高齢者が施設に入ると生活全般が整えられ、安全に安心して暮らすことができる。半面、心の自発性を発揮する機会が少なくなり、自分が自分らしく生きようとする意識が失いがちになる。でも施設の管理体制とは関係なくのびのびと生きている動物の自然な姿によって、主体的に生きようとする意識が呼び覚まされ、自我を回復することができるのではないかと」。私たちはその実例を、たくさん目にしました。